

の御崎と云鐘のある所は、織幡山の良の方五町許おきにあり、今も鐘のある所いちじるしく見ゆるよし、里人いえり、略○下

〔西遊記續編〕筑前に遊びし時博多の崇福寺に暫くとゞまりて、此あたり一見す、略○中 詩を賦し禪を談せしいとま、當國の奇事をとひしに、其座に在る人の曰、此國の海中に鐘あり、其處を鐘が岬といふ、織幡山の良の方、岸を離る、事纔に五町ばかりの所にあり、船にて其處にいたれば、よく見ゆるよし、里人いふ、是はむかし三韓より撞鐘をふねに積て渡せしに、龍神鐘を望み、此海にいたりて浪風俄に起り、船くつがへりて、鐘は終に海底に沈みぬ、其三韓よりわたりし事は、古き事には、萬葉集の歌にも、千早振鐘がみさきを過れども、我は忘れず、志賀のすめ神よみ人しらすと出たり、又新古今にも、白浪の岩打波やひゞくらん鐘のみさきの曉の空、衣笠内大臣、又家の集音に聞く鐘のみさきはつきもせずなくこゑ響くわたりなりけり、俊頼又大名寄に、聞あかす鐘の岬のうき枕夢路も浪に幾夜へだてぬ、など諸集に見へたり、略○下

大門岬

〔筑前國續風土記二十一志摩郡〕芥屋大門

芥屋村より乾の方五町許に、大門崎とて、海中にさし出たる岩山の出崎あり、その出崎はすべて一箇の岩山にして、小き口つゞけり、そのかたち、あたかも龜の方をのべたるに似て、出崎につゞけり、山尾は細し、出崎の岩山は少大にして高し、この出崎の岩のかたち、こまかにみれば、黒く八九寸、一尺三寸あるひは一尺八寸ばかりなる方なる石の柱なり、其技はあたかも良工の手をつくし削なし、數百萬をつがねて、高く海中に立たるがごとくなる形壯なり、この岩山は高き事海上に三四十間程、そのそばだてる事屏風をたてたるごとし、城郭の石壁のごとし、この上はかへつてまへにさしかゝりて、下を覆へり、その山下に大門とて、北にむかへる大なる岩窟あり、その内海水はなほだ深くして、その色黒く、よのつねの水色にことなり、是山影にして、また水きわめ